PUBLICATION: EXPOSURE
COUNTRY: JAPAN
DATE: JULY 2001

DESCRIPTION: GENERAL ARTICLE ON THE LIGHT SURGEONS

018

VJ FROM LONDON Vol.4 The Light Surgeons 編

The Light Surgeons, "ELECTRONIC MANOEUVRES 2" at ICA 05 May 2001

『VJ from London』というお題を掲げてロンドンにいながら日本のVJばかり書いていた自分に、そろそろロンドンのアーティストを・・・と、焦りを感じていた今日この頃。

そこでなんとか思い当たったビジュアルユニットがThe Light Surgeons（ザ・ライトサージェンツ／以下TLS）だった。またまた今回も友人のつてながらも、本当にレスをくれるのだろうかと気苦労に気苦労を重ねてようやくアポ取り成功。16mmやスライドなどのアナログをメインにしたビジュアル手法で知られるユニットはロンドンでTLSだけと言っても過言ではないだろう。（本当はその他いくつかのグループも存在するが・・・）10年前のロンドンのナイトクラブで音楽プラス映像という、今ではごく普通になりつつあるスタイルを既に取り入れ始めていたTLS。TLSとはいったい何なのか、何者なんだろうかと、そして自分自身もVJという事情もあり、かなりの緊張を押さえながらショーディッチにある彼等のオフィスへ侵入して行った。オフィスにいたのはTLS創始者のChris Allen と Jude Greenaway そしてJames Price、その他のTLSスタッフ。天井高く日当たりのよい部屋にはループになったフィルムの束、スライド写真、8ミリフィルム映写機その他色々な機材が積み上げられており、アナログ好きでもある自分は「ああ、こんな作業部屋があったら・・・」と即考させられる。オフィスに置いてある様々な機材や本やスライドなどの資料を横目に、熱いコーヒーを頂きつつ、早速、創始者メンバーのChris Allen（クリス）とインタビューを始めた。

● まずTLSのメンバー紹介お願い致します。

Chris Allen、Jude Greenaway そしてJames Price。でも全てにおいてコンセプトやアイディアのダイレクションは僕がやってるんだ。僕はクリエイティブダイレクターみたいな感じだな。でも制作はもっとオーガニックな感じで進めている。TLS皆でいろいろなアイディアを出し合ってる、組織みたいなものだね。

● TLSを始めたきっかけを教えて下さい。

僕の兄はDYNAMIC SYNCOPATIONというニンジャチューンのDJなんだ。それで昔から兄が音楽に優れていて僕がビジュアルに優れていたからTLSを始めたのも自然な流れだった。兄がDJするところに僕がスライド写真や8ミリ映像を流し始めたんだ。そんな頃、僕もデザインのカレッジに行き始め、そのコースでJudeに出会い一緒に活動しだした。グラフィックデザインのバックグラウンドがある僕自身、レコードジャケット等のグラフィックデザインもするんだ。

● TLSのパフォーマンスについて聞かせて下さい。

TLSはビジュアルでの音楽の反映をしていると思ってる。絵によって音楽の表現というか・・・。

だけどそれは主にナイトクラブの中のみにおいて僕達がしてきた事であって、クラブやダンスカルチャー、そしてDJやサンプルリングカルチャーの表示だったと思う。僕達の活動は素材を集めて一緒にし、相互関係させる方法をとってて、きっと誰かがレコードをプレイすること位面白い事だと思う。

色んな種類の媒体を使って色々な種類のテクニックを使ってる。それと同時に物理的でもあるんだ。沢山のループや違ったプロジェクターとか・・・そういった物理的理由でonedotzeroのELECTRONIC MANOEUVERSでは影を使う事にしたんだ。パフォーマンスは機材操作も含んでいて、そういった物理的要素も僕達のショウや活動においてとても重要な特徴なんだ。

● パフォーマンスの間、実際は何をしているんですか？

何をしてるかって・・・？ 狂った様に走り回ってるよ。ビデオテープを巻き戻したり・・・だけど主にonedotzero5ではビデオミキサーをしてた。MX50って言うミキサーを使ってた。VHSテープとかDVテープ、それからラップトップからのイメージとか、もちろん16mmフィルムのループとかスライドなんかのアナログとか・・・全てのものを時間内に操作しようとしてる。・・・オーケストラにいる指揮者みたいなものかもね。

● 他のメンバーは何をしているのですか？

他の人たちは・・・そのパフォーマンスによって色々だね。ナイトクラブで言ったら、僕達は音楽をプレイしている訳じゃ無い、それで僕達のパフォーマンスはもっとフリーなスタイルというか、きっとジャズみたいなものだよね。実際的には、たまに交代して替わりばんこでミックスをしてみたりとかね。僕達皆全員で、君が呼ぶ『VJ』とやらをやっているよ。

・・・僕達のショウも最近は「編集された」ものになってきているかもしれない。レコードをプレイするみたいに、ビデオテープにまとめてある。自分達の音楽作りも始めてて、それにビジュアルビデオも作ったりしているんだ。

● スライドや16ミリフィルムのプロジェクションがTLSの技として有名ですが今後は完全なデジタル化の方向に向かっていくのでしょうか？

多分ね。もう、ゆっくり始まっている事でもあるけど・・・ビジュアルパフォーマンスにおいてのデジタル化はある一種の問題解決という事だと思う。例えば、ビデオテープなんかは自分でキューポイントをリニアで探さなきゃいけなかったりするけど、DVDだったら何時でもディスクのどこでもキューポイントが選べるよね。出来たらTLSの全ての作品をDVDにおとしたい。

だけど、僕達がいつも興味を持っているのは作品制作においてのローファイなプロセスということなんだ。だって、コンピューターを使わないローファイなパフォーマンスにおいては始終予想がつかない事が起きるんだよ。僕はそれをハッピー・アクシデントって呼んでる。もし全てのパフォーマンスがデジタルで念入りに計画立てられていたら、簡単過ぎてつまらないだろうね。制作において何か制約みたいなものがあったほうがとってもクリエイティブになれると思うんだ。だから、物作りにおいて、一番新しいコンピューターを持っていないからとか、いい機材が無いからとかっていう意見を持つべきじゃ無いと思う。何時でも最高の作品は小さい事から生まれたりするって言う事実を忘れるべきじゃ無いと思う。僕達の過去の最高のショウもビデオすら使っていなかったし、とってもローファイだったよ。

僕達の作品について言えば、デジタルフォーマットは僕達のワークをもっと「オーディオ・ビジュアル」な、もっと音楽に近いものものにしてくれると思ってる。同時にいろんな人の活動をインターネットやDVDなんかで広めていかなきゃいけないと思う。デジタル化という事は僕達にとって必然的な事だと思うし、僕達も既にデジタルかもしれない。

とにかく、その前に起きていたものも含めるという事であって、古いものと新しいもの、っていう二つの物事の調和を図っていきたいね。

● ところで今現在、興味があることはなんですか？

個人的には物語りの映画を作ることかな・・・・・

と、クリス節は続いていった。本紙では書き表されていないその他の色々なトピックの彼の意見も興味深かったが、特に印象に残っていたのが彼の「VJ」という言葉に対する疑問感であろうか。日本のトレンドで出来た「VJ」という言葉のかわりに、クリスとしては「Light and Sound Design」という表現を使って欲しそうで、それが一番しっくりしていると述べていた。

TEXT: 隆声 Ryusey MAIL: ryusey@sanfrandisco.org
PHOTO: Kay Onuma MAIL: kay@appleonline.net

English text "The Light Surgeons / VJ FROM LONDON Vol.4" available @ http://beatuk.com/e-bee

The Light Surgeons:
info@thelightsurgeons.co.uk
http://www.av-op.com
http://www.lightsurgeons.co.uk